

447 診断精度からみた肺癌の骨シンチの臨床的意義

小田野幾雄、酒井邦夫、飯田洋子、
秋田真一、末山博男（新潟大 放）

骨シンチは転移性骨腫瘍の早期発見に極めて有効な検査法であるが、疾患特異性が低いのが欠点である。われわれは肺癌175例の骨シンチのうち、骨X-P、X線CT、経過観察等により、骨転移の有無について比較的確診の得られた93例を対象として、肺癌における骨シンチの臨床的意義を検討した。10例（10%）が骨シンチによりstageが変更された。骨シンチ単独の診断精度はsensitivity=100%、specificity=71%、accuracy=78%であったが、骨シンチ+骨X-Pの診断精度はsensitivity=100%、specificity=81%、accuracy=88%となり、骨シンチに骨X-Pを付加することにより10%の診断精度の向上がみられた。肋骨は骨転移の最も多い部位であるが、同時にFalse Positiveの最も多い部位であった。肋骨の集積パターンを、(I)一肋骨における単発性のspottyな集積、又は肋軟骨移行部のspottyな集積と、(II)一肋骨における境界不鮮明な帯状集積、又は同一肋骨上にskipする帯状（又はspottyな）集積とに分けると、骨折は前者に、骨転移は後者に多い。

448 骨シンチによる悪性リンパ腫の骨転移の検出

猪狩秀則、小野 慈、大竹英二、朝倉浩一、
安藤和夫、竹林茂生、中森昭敏、勝俣康史、
野沢武夫、松井謙吾（横浜市大・放）

悪性リンパ腫の病期決定の手段としての骨シンチの必要性の有無は意見がわかれている。一方、症状、病的所見の生じた患者管理には、X線診断に比し有効な検査として日常性がある。昭和50年1月から57年12月の間に骨シンチを行った症例を調査し、骨転移頻度、部位を検討した。

悪性リンパ腫の病理診断の得られた男42、女31、計73症例、113スキャンを調査対象とした。ホジキン病13例、非ホジキンリンパ腫60例。年齢は13才〜85才。平均44.3才。骨転移の診断は理学所見、X線所見、経過観察、剖検所見等を総合して行った。骨原発の悪性リンパ腫の症例は除外した。

初診時骨転移のみられた症例は62例中8例であった。経過を含めた全症例の骨転移頻度は73例中11例15%であった。転移部位には特有な傾向はなく、ホジキンでは13例中3例、23%、非ホジキンでは60例中8例、13%であった。

449 骨シンチグラフィーによる胃癌骨転移の臨床的検討

瀬戸幹人、利波紀久、小泉潔、須井修、久田欣一
（金大 核）

骨転移という観点からは、その頻度が低い印象を受けるために注目され難い胃癌の骨スキャン72例を検討し、胃癌の臨床的諸因子と骨転移率について興味ある結果を得た。結果は26%（19/72）に骨転移を認めたが、隆起性胃癌、上皮内癌と漿膜浸潤のない進行癌、領域リンパ節転移を認めないN0、高分化腺癌、乳頭状腺癌には骨転移を認めず、体部及び噴門部占拠癌、近接臓器浸潤のある進行癌では骨転移率が高かった。骨転移例19例中3例に骨スキャン上も臨床的にも非常に類似した特徴を示したび慢性骨転移例を認めた。骨転移は幽門部癌で認めず体部及び噴門部癌では骨転移率が有意に高いこと、骨転移率と肝転移率はほぼ同率であり両者に明確な相関がなく、骨転移例の67%は肝転移を認めない事実より、骨転移様式に従来の門脈型以外に、脊椎静脈叢の関与する非門脈経路の存在を新たに推察した。

450 骨転移で発見された腎細胞癌の骨シンチグラフィー

松本誠一、峯 博子、杉山丈夫、金田浩一
（癌研 放）

磯辺 靖、和田成仁、川口智義（癌研 整）

1978年から1982年までの4年間に骨転移を初発症状として当院を受診し、全身骨シンチを施行した腎細胞癌は10例である。これらを検討し以下の如き結論を得た。

①10例中9例において腎の腫瘍部に一致して陰影欠損を認めた。陰影欠損が不明瞭だった症例の原発巣は上極に存在した4×5×4cmと比較的小さかった。骨XP所見にこの腎陰影欠損像を加味することで腎細胞癌の骨転移との診断は比較的容易と考えられた。

②骨シンチと骨XPを比較すると骨シンチ上、coldないしfalse negativeな病巣があった。従って本症の骨転移検索には両者を併用することが望ましい。

③10例中、骨シンチおよび骨XPにて転移巣が孤立性の3例に対しては、原発巣および骨転移巣の手術を施行することによって比較的良好な予後が期待できた。